
長い散歩

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

長い散歩

【Nコード】

N2853E

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

お母さんが居ない日におばさんがやってくる。私は妹の空のように、おばさんの事を好きになれない。いつものように、お父さんはおばさんと長い散歩にでかける。

お母さんが居ない日、お婆さんの爪はいつも真っ赤だ。
私はそれが嫌いだった。

お母さんは、毎週土曜日に病院へ通っているから、彼女は私たちの面倒を見るという名目でやって来る。

田舎の一軒家に住む私たちと違って彼女は都会で一人暮らしをしているらしい。

彼女の衣服や髪からは、一度も行った事のない都会の匂いが染み出ている。私はその匂いも嫌いだ。

お婆さんは、吾妻屋のケーキや羊羹を買ってきてくれるので空はいつも大喜びだ。

みつともなくはしゃいでお婆さんに纏わりつき、媚びを売る。

「お婆ちゃん大好き」

と屈託もなく笑うのだ。

しばらく、4人で話をしてから

「冬子ちゃん、空ちゃんの面倒を見てあげてね」

お婆さんはそう言って、お父さんと散歩に出かける。

いつも、私と空は二人だけで遊んでいるから、そんな事は言わなくていいのに、一々念を押すようにそう言うのだ。

「空、あっちで遊ぼう」

「うん、あっち行こう」

こういう時、私たちは決して逆らわない。

空と人形遊びをしながら、私は何故か心がざわざわする。

天気良かったので、家中の窓が開け放たれていて、庭のアロエが微かに芳香を放つ。

「ねえお姉ちゃん」

空が別段面白くもない冗談を言った。

私は笑おうとして、口の端を少し開いたが、窓の外の黒い影を見

て凍りついた。

「誰？」

空が振り向いた瞬間に、その影は消えていた。

「どうしたのお姉ちゃん？」

「うっん、何でもないわ。テレビでも見ていようか？」

「ケーキは？」

「3時になってからでしょう？ おばさんが帰ってきたら怒るよ」

「大丈夫だもん、まだ帰ってこないよ」

空は知っているのだ、二人が5時を過ぎるまでは帰ってこない事を。

NHKの教育番組を見て、早めにケーキを食べる。大きなイチゴが乗ったショートケーキだ。

「お姉ちゃんのイチゴ、あげようか？」

「やったあ」

空はイチゴが好きだ。私はチョコレートケーキが好きだけど、それを言った事は一度もない。

冷蔵庫に牛乳をしまう為に、私は台所に行った。

空はテレビに夢中だし、ちょっとぐらい離れていても大丈夫だろう。私はそう判断した。

自分の部屋に戻ってマンガ本をとり、テレビのある居間に戻る。相変わらずテレビは、教育放送を流しているが、空の姿が見えなかった。

「空？」

呼びかけても返事が無いので見渡す。テーブルの下にもいない。「空、どこいったの？」

ガタン。襖で仕切られた隣の部屋で物音がした。私は怖くなって体を強ばらせた。

変な汗が出て、ドキドキする。思い切って、襖を開ける。

「誰か居るの？」

そこにはお母さんの化粧台があった。鏡に映っているのは紛れも

なく、あの女だった。

唇は不気味な程に赤く、手足の爪が血のように染まっている。

「……お姉ちゃん、ゴメ」

私は手を突き出した。手のひらで叩いた。一度叩くと、止まらなくなつて二度、そして三度叩いていた。

「イタイ。ごめ、ごめんなさいお姉ちゃあん」

体で息をしながら、もう一度手を振り上げて、そのまま手を下ろした。

畳の上には、顔を泣きはらし、うずくまっている妹がいた。

私にはその瞬間に、自分のしでかした事が解った。

空は恐怖の目で私を見上げていた。

私はそのまましゃがみこんで、妹の顔を改めて見た。

「ご、ごめんなさ、んっ」

他愛のない悪戯だった。お母さんの化粧品を勝手に取り出して遊んでいたのだ。

涙が、空の唇の紅を流して、服や手のひらを真っ赤に染めている。それは本物の返り血のようだ。

私は妙に冷静に、その様を眺めた。空の顔は幼いながらもお母さんにそっくりで、それはゾツとするほど、おばさんの顔にも似ているのだ。

「ゴメンね、痛かったでしょう」

私はできる限り優しい声で彼女に言った。私の中で、正体不明の黒い何かが産まれた。

「ごめんなさい……もうしないから」

「うん、空が分かってくれば、それでいいのよ」

私は震えている妹の体を抱きしめて、風呂場へ向かった。

長い散歩からお父さんが帰ってきた時、私はまだお風呂場に居た。妹の血で汚れてしまった手や顔を石鹸で洗い流すのはなかなか大変だった。

私は、お父さんの元へ向かった。

「おばさんは帰ったの？」

お父さんの目は私の顔をじっと捉えていたが、その視線だけがさまよっているのが解った。

「おばさんは……」

と父が呻いた瞬間に、玄関の引き戸が開いて、血だらけになったお母さんが靴のまま入ってきた。

「汚れちゃったわ、お風呂に入らなきゃね」 お母さんは誰に向かって言うでもなく、呟いて私の側を通り抜けていった。

私は、風呂場の床に倒れている空の事を思い出して言った。

「庭に居たのは、お母さんだったのね」

お父さんは、私の顔を見た。そして、膝から崩れ落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2853e/>

長い散歩

2010年10月27日14時12分発行